

『万葉集』における助詞「は」の用法

——「主題」・「とりたて」をめぐって——

森 野 崇

はじめに

「は」という助詞については、多くの先学によって、既に様々な分析が行われている。特に、現代語の「は」の場合は、「が」との比較対照を中心とした研究によって、その重要な機能の幾つかが明らかにされてきた。しかしながら、古代語の「は」に関する研究は意外に少ないようである。恐らく、「は」という助詞が、通時的にみた場合、「が」などと違ってそう大きく意味・用法が変化してきているとは考えられず、現代語の「は」の用法とほぼ同じ用法を一貫して有してきたと認められるからであろう。だが、本場に「は」は上代からずっと同じ意味・用法を有してきたのであろうか。このことを考察するには、やはり各時代の「は」の用例をみてゆかなくてはなるまい。本稿では上代の「は」を対象として、そうした調査を行った。つまり、現代語の「は」の研究の成果を参考としつつ、上代における「は」の用例を分析してゆき、「は」の本来の用法とはどんなものなのか、全ての「は」

に共通する用法とはどんなものなのか、ということを考えてみることにしたのである。資料には、今回は『万葉集』を使用した。その結果得られた結論は次のようなものである。

「は」は表現主体が前提として特に意識していたものや事柄をとりたてて示したり、その事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示す場合に用いられる。

以下この結論についての説明を中心として、論を進めてゆくこととする。

○テキスト及び考察の対象とした「は」について

テキストには岩波書店刊の日本古典文学大系（以下「大系本」と略称）『万葉集』を使用した。また、本稿における本文引用にもこれを用いた。

次に、今回の考察の対象とした「は」についてであるが、基本的には一字一首節表記のものを重視した。これは「は」以外の助詞（を）、「に」等）についても同様である。また、形容詞や副詞などについても、「は」と関連して問題になる場合は、一字一

音節表記のものを原則として重くみた。なお、用例の総数があまり多くない場合などは、一字一音節表記以外の例も重視して扱った。但し、「は」については、原文に全く表記されていない例は、今回の考察の対象から除外しておいた。

また、別の理由で今回の考察の対象から除いた「は」が三種類ある。①仮定表現に用いられる「は」、②④以外の「ずは」の「は」、③歌の終わりの部分に示される「はも」の「は」、である。これらはそれぞれ、①「仮定表現に用いられる」という性質上、むしろ接続助詞「ば」と通じるもので、ここで述べるような「は」と同列に扱うのはどうか、②「ずは」という語法自体今なお問題を含んでおり、別の機会に考えたい、③「はも」は終助詞と見做され、従って今回論じる係助詞「は」とは区別すべきである、という理由により、除外した。

一 『万葉集』における「は」の用法の整理

(一) 上接語による「は」の分類

さて、『万葉集』中の助詞「は」の用法について述べてゆくのであるが、まず、集中の「は」をその上接語によって分類してみる。以下に幾つかの表によって、その結果を示しておく。なお、「をば」「こそば」等の「ば」も含めてある。

〈表1〉

体言に下接した「は」	
「が」格に立つ語に下接したもの(7)	1183

「を」格に立つ語に下接したもの
「に」格に立つ語に下接したもの
時を表す語に下接したもの(イ)
準体言に下接したもの

34 160 39 174

〈表2〉

格助詞に下接した「は」					
「を」に下接したもの	21				
「に」に下接したもの	128				
「へ」に下接したもの	1				
「と」に下接したもの	26				
「より」に下接したもの(二)	36				
	0	8	0	59	1

〈表3〉

係助詞に下接した「は」			
〈体言+係助詞+「は」〉	15		
「が」格に立つ語に下接したもの	2		
「を」格に立つ語に下接したもの	0		
時を表す語に下接したもの	3		
	0	0	0

〈格助詞＋係助詞＋「は」〉		
「に」格に立つ語に下接したものは	0	1
副助詞に下接した「は」		
〈体言＋副助詞＋「は」(オ)〉	4	1
右の形以外のもの		
	0	3

〈表4〉

接続助詞「て」に下接した「は」	20	12
間投助詞「い」に下接した「は」	1	0

〈表5〉

動詞の連用形に下接した「は」		
二つの動詞間に介入したもの(カ)	7	13
〈動詞＋「は」＋「す」〉	2	2
形容詞の連用形に下接した「は」		
〈形容詞＋「は」＋「あり」〉	2	4
〈形容詞＋「は」＋動詞〉	2	2

〈表6〉

形容動詞の連用形「に」に下接した「は」	2	2
---------------------	---	---

断定の助動詞「なり」の連用形「に」に下接した「は」

16
10

〈表7〉

副詞に下接した「は」(キ)	7	9
---------------	---	---

表注(ア)「梓弓弦緒取りはけ引く人者後の心を知る人そ引く」

(九九)のように「が」格ともしにくい、まさに主題とした方がよいような例が七例ほどあったが、これらも「が」格の項に含めた。

(イ)時を表す語が「が」格等に立つ場合はここには含めない。ここに含められるのは、あくまでも時を表す語が時格や時の修飾成分として機能していて、それに「は」が下接した例だけである。なお、「時格」「時の修飾成分」といった用語は北原保雄氏の術語に従う。

(ウ)助詞に「は」が下接したものなど、上接語が確実にそのように読めるかどうかが問題となるようなものについて、は、確例 推定例 のように示した。確例は主に一字一音節表記

のものであるが、「社(シ)こそ」、「庭(ニ)には」等も含めてある。表3以下も同様である。

(エ)「よ」「ゆ」「ゆ」(六例)もここに一括した。また、「従」表記の例も結局「より」「よ」「ゆ」のいずれかに読むと考えられるので確例として扱った。

(オ)上接の体言は「が」格に立つ語三例、時を表す語二例である。

(カ)「生ひ波生ふるがに」(三四五二)もここに含めた。

(キ)時を表す語の場合は表1の「時を表す語に下接したものの」の項に含めた。

(二) 「主題」という面からの検討

右に示した表をみて、すぐに気がつくことは、やはり体言に直接下接した「は」の例が圧倒的に多いということであろう。準体言に下接した「は」も含めると、総数二〇一二に對し、その数は実に一五九〇例となる。接統の面から考えた場合、体言に下接するのが、「は」の中心的用法であると言えよう。

しかしながらこれはあくまで「は」の、いわば外面的な特色である。そこで「体言＋は」という形について、もう少し深く考えてみよう。結論から先に言ってしまうと、これらの例は現代語の「は」の最も中心的な用法とも言える「題目提示」という見方で分析できるものである。二、三例をあげておこう。

1135 宇治川齒淀瀬無からし網代人舟呼ばふ声をちこち聞ゆ

(巻七)

1972 野辺見れば撫子の花咲きにけりわが待つ秋者近づくらしも

(巻十)

4397 見渡せば向つ峰の上の花にはほ照りて立てる波愛しき誰が妻

(巻二十)

現代語の方で詳細に研究されているので、今更述べる必要もないのだが、「は」にはその上接語を主題としてとりたてて提示する働きがある。『万葉集』中の、「体言＋は」の「は」にも、そうした働きが見出されるのである。例えば、一二三五番の歌では、「宇治川について言えば」と「宇治川」を特に主題としてとりたてて示しているものであり、一九七二番の歌では、作者は「わが待つ秋」を主題として提示していると解釈できる。四三九七番の歌

の場合も同様である。つまり、『万葉集』における「は」の、最も多い接統の形は「体言＋は」というものであり、その場合の「は」は現代語におけるそれと同じく、主題を示す役割を担っていると考えられるのである。

しかしながら、『万葉集』にみられる「は」は、前に掲げた表からもわかるように、体言に下接するものばかりではない。動詞に下接したものもあるし、形容詞や副詞に下接したものもある。これらの「は」についても、主題を示すという見方で分析することが可能なのだろうか。また、『万葉集』においては、体言に「は」が下接した例に次いで、格助詞に「は」が下接した例が目立つのであるが、この格助詞に下接した「は」についてはどうであらうか。

まず、動詞や形容詞、副詞に下接した「は」について考えてみよう。次に幾つか例を示す。

1246 志賀の白水郎の塩焼く煙風をいたみ立ち者上らず山に棚引く

(巻七)

1871 春されば散らまく惜しき梅の花暫者咲かず含みてもがも

(巻十)

484 咲く花は移るふ時ありあしひきの山菅の根し長く波ありけり

(巻二十)

こういった「は」に對しては、主題を示しているという見方は全くあたらないようである。例えば、一二四六番の歌の場合、「立ち」を主題として提示していると考ええることは無理であるし、『立ち』について言えば「など」と解することはナンセンスであ

ろ。副詞に下接した「は」の場合も同様である。「暫」はやはり主題として示されているとは考えられない。四四八四番の歌における「長くは」の場合も、「長く」を主題化しているとか、「長く」について言えばあったのだなあなどと解釈することなど全く無理なのである。主題という考え方は非常に魅力的なものではあるが、結局それを「は」の本来の用法と認めて、『万葉集』中の「は」を統一的に説明することは不可能なのである。

(三) 「体言＋格助詞＋は」について

このように、動詞や形容詞、副詞等に下接した「は」について考察することによって、主題表示という観点からでは、「は」の用法の統一的な説明ができないことが、明らかにになったのであるが、序でに、『万葉集』において体言に下接する例の次に多かった格助詞に「は」が下接する場合を考えてみよう。現代語の「は」を論じる場合にも、この「体言＋格助詞＋は」は、主題を示すという点で「は」を二分する際に、研究者によって意見の割れるところであるので、本稿の主旨からはややそれるが、ここで私の考えを述べておく。

私は「体言＋格助詞＋は」の「は」が主題を示しているとは考えない。以下にその理由をあげる。

前述のように、副詞や形容詞に下接した「は」は主題を示しているとは考えられないのであるが、ここで副詞や形容詞について考察してみると、これらは文の成分が必要とする実質的概念と関係構成的職能³⁾とを一語のうちに兼備したものだと言える。そこで今問題となっている「体言＋格助詞」について考えてみると、体

言は実質的概念を持つものであり、格助詞は関係構成的職能を持つものである。従って、「体言＋格助詞＋は」も「副詞＋は」等と同じく、文の成分として必要な実質的概念と関係構成的職能とを有したものに「は」が下接しているとみることができる。このように文の成分としての条件を完備し³⁾、他の文の成分と密接に結びつくものに「は」が下接した場合は、やはり体言に「は」が直接付く場合とは区別しておくべきではないだろうか。勿論、私は副詞等と「体言＋格助詞」とを同等に考えているわけではない。副詞等が修飾成分であるのに対し、「体言＋格助詞」は補充成分であるという大きな相違を始めとして、二者の間には幾つかの違いがみられる。だが、主題を示すという点から「は」を二分する際には、やはり「体言＋格助詞＋は」は、文の成分として完全なものに「は」が下接している点で、後者に含めた方がよいように思う。

第二の理由は、「体言＋は」の場合、表現主体には格についてのこだわりが全くないのではないかということである。例えば「大和は」と言ったとき、話し手は格関係を全く考えていないと思われる。題目提示の場合は格関係は問題外なのである。しかしながら、「大和には」と言った際には、話し手はやはり格関係を意識しているのではないだろうか。

第三の理由は、第二の理由と関連するが、「体言＋は」と「体言＋格助詞＋は」との間の意味の違いの問題である。「国原に煙が立っている」と言った場合と、「国原には煙が立っている」と言った場合、更に「国原は煙が立っている」と言った場合とは、

意味の上で微妙な違いが生じている。この違いは重視すべきではないだろうか。「を」と「をば」、「は」（格関係から言えば「を」格に立つ語に直接下接したもの）の間に、やはり同じような意味上の差異といったものが存在する。このように、異なった意味を持つと考えられる「体言＋は」と「体言＋格助詞＋は」とを、主題であるとして、一つにまとめてしまつてよいものであろうか。

以上のような理由から、私は「体言＋格助詞」に下接した「は」を主題を示しているとはみないのである。従つて本稿において、便宜上主題表示という観点から「は」を分ける際には、「体言＋格助詞」に下接した「は」は、主題を示しているとは考えられない「は」の方に含めることとする。

（四）「主題」の限界と「とりたて」という説明

今までみてきたように、主題という観点をとり入れれば、ある「は」については非常にうまく説明がつく。一つのすばらしい分析である。しかも、この用法は上代の「は」だけを考えただけでも、十分認められる「は」の中心的用法である。例えば、三省堂刊の『時代別国語大辞典 上代編』の「は」の項にも、「④単文中にある場合…（中略）…その事物を指定的にとりたて、またその語句を以下の叙述に対する主題として提示する」というような記述がある。だが、主題を示すという捉え方では、「は」についての統一的な説明が不可能であること、前述の通りである。では全ての「は」に共通して見出される本来の用法はどのようなものだろうか。勿論、「とりたて」という機能は全ての「は」にみられるもののようにあり、これを以て「は」の本来の用法とするこ

とは十分可能である。事実、『時代別国語大辞典 上代編』も④従属句中にある場合」の説明に際しても「へ」の接する語句は指定的にとり立てられる。他の何かと対比しつつ取り立てられることが多い」と、「とりたて」という語を用いている。結局「とりたて」を「は」の本義とみているようである。だが、これでは今度は大雑把な説明となってしまうのではなからうか。特に古代語の場合、「ぞ」や「こそ」といった係助詞が「は」と共にある。これらもある意味では「とりたて」を行っていると言えるのではないだろうか。もう少し、「とりたて」の内容について考察を加える必要があるように思われる。特に、主題とは考えられないような、動詞や形容詞、副詞等に下接した「は」について、深く考えねばならないであらう。

二 「表現主体の意識」という観点の導入

さて、これまで述べてきたように、「主題」という観点からでは「は」に統一的説明を与えることができず、「とりたて」では今度は意味が漠然としてしまう。何か、よりはっきりとした主題「は」と非主題「は」に共通した用法は見出せないものだろうか。ここで私は「表現主体の意識」という面から、「は」の分析を試みたいと思う。「表現主体の意識」といったものを持ち込むことによって、「は」の「とりたて」の性格が明らかになってくると考えられるからである。以下に、主題を示すとは考えられないものと、主題を示すものとに便宜上「は」を分けて、説明してゆくこととする。

(一) 主題を示しているとは考えられない「は」の用法

主題を示しているとは考えられない「は」に共通してみられる用法は、「表現主体が前提として特に意識していた事柄をとりたてて示したり、その事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示す」というものである。

まず、次の歌をみていただきたい。

1871 春されば散らまく惜しき梅の花暫く咲かず含みてもがも

(巻十)

この歌を詠んだ際、作者は「花」というものは、いづれ咲いて、そして散ってしまうものだ」ということを前提として特に意識していたのではないだろうか。「当然いづれ咲く」という前提があったからこそ、「暫く咲かず含みてもがも」という表現が生まれたのである。つまり、この「は」は作者が前提として特に意識していた事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示していると言える。もう一首考えてみよう。

1633 手もすまに植ゑし萩にや却りて者見れども飽かず情尽さむ

(巻八)

この歌の「却りては」は直接には「飽かず」と関係していると思われる。また、「手もすまに」の意味は現在なおはっきりしていないのであるが、一応「一所懸命手を働かせて」という大系本の解釈に従っておく。つまり、「一所懸命手を働かせて植ゑた萩」ということになる。手を抜かずに、一所懸命植ゑたのであるから、当然満足できそうなものである。ところが実際は「却って満足できない」のである。とすると、この「は」もやはり前提と

して特に意識していた事柄に関連した「は」であるということになろう。「当然満足するはずである」ということを、作者は前提として特に意識していたのであり、それに関連して、「却りては見れども飽かず」という表現が行われたのである。一見、意識していたことに関連して用いられたとは思われないこういった「は」も、このように考えると、やはり前提として特に意識していた事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示しているものであるということが、明らかになってくるのである。

副詞に「は」が下接した例が続いたので、他の例を少し示しておこう。

41 大君の命恐み大曠の時に波あらねど雲がくりまます (巻三)

1246 志賀の白水郎の塩焼く煙風をいたみ立ち者上らず山に棚引く (巻七)

(巻七)

1755 鶯の 生卵の中に 霍公鳥 独り生れて 己が父に 似て者

(巻九)

鳴かず 己が母に 似て者鳴かず……

これらの例も、これまで考えてきた「は」の用法と異なるものではない。試みに一七五番の歌をみてみよう。ホトトギスには、自分の卵をウグイスやミソサザに預けて、ヒナを育ててもらおうという習性がある。この歌はそのことを歌っている。ウグイスの卵の中に混じり、一羽だけ生まれたホトトギス。普通ヒナは親鳥のように鳴くものである。当然このヒナも父や母のウグイスのように鳴くはずである。このような事柄を、作者は前提として特に意識していたのであろう。「似ては鳴かず」は、そうした作者の意識に前提として特に上っていた事柄に関連する形で、ある事柄

をとりたてて示した表現なのである。

次に、表現主体が前提として特に意識していた事柄を、ストレイトにとりたてて示している「は」について述べる。

2195 雁がねの声聞くなへに明日より春日の山はもみち始めなむ

(巻十)

3698 天離る鄙にも月は照れれども妹そ遠く波別来にける

(巻十五)

4884 咲く花は移ろふ時ありあしひきの山菅の根し長く波ありけり

(巻二十)

二一九五番の歌について、まず考えてみよう。これは「黄葉を詠む」として収められた歌のうちの一首である。「黄葉を詠む」には四一首ほどが並べられているが、そのうちの八首が、雁との関連で紅葉を詠んだものである。つまり、約五分の一の歌が雁を持ち出しているのである。当時の人々にとって、雁の飛来と紅葉とは密接に結びついたものであったのであろう。だから、雁の鳴く声が聞こえるようになれば、当然、当時の人々は紅葉が間近であることを意識したと推測される。この歌の作者も同じように、紅葉の時期が直前に迫っていることを当然のこととして、特に意識した。それ故「明日よりは春日の山はもみち始めなむ」という表現となったのであろう。この歌の場合、「明日より」とはつきり考えていたかどうかはやや微妙なところであるが、夜、雁の声を聞いて、「明日から紅葉し始めるだろう」と具体的な時期をも意識したといったことは、十分に考えられると思う。

もう一首、四四八四番の歌はどうであらうか。この歌は、橘奈

良磨の政変の企てに参画を勧められながらも、それを辞した大伴家持が、自分の心情を表現したものと思われる。家持は政権を握って、一時スポットを浴びることを、「咲く花は移ろふ時あり」と、花に譬えて否定的に述べている。まるで、政変の企てに参画した人々、自分の一門にその空しさを論じつつ、自分自身もそれを再認識しているかのようである。このように述べた時点で、「では何が長く保つものだろうか」といったことを、家持は考えたのではなからうか。そこにも多分に、自分自身は解答を得た問題について、企てに参画した者や一門の人々に尋ねるような雰囲気があるが、ともかく「長くあり」は前提として特に意識されていたと考えられる。丁度「長いものは何だろうか」という表現において、「長いもの」が前提として特に意識されているのと同様である。そのために、「長くはあり」と「は」が介入しているのであらう。そして「山菅の根」が「長い」に結びついたとき、「山菅の根が長く保つものだったのである」といった、発見したことを確認するような心持ちで、「けり」が用いられたのではないだろうか。結局、この歌の「は」も、これまでみてきた「は」と同じように考えられるのである。

以上述べてきたように、主題を示しているとは考えられない「は」の場合、そこには「表現主体が前提として特に意識していた事柄をとりたてて示したり、その事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示す」という共通した用法が見出されるのである。

(二) 主題を示す「は」の用法

さて、これまでみてきたような「は」の用法に最もよく適合するものが、「主題」説明」という構文である。つまり、主題を示す「は」は、前節で説明した「は」の機能を最大限に用いたものである。そもそも、何かを説明する際に、表現主体が全く考えていないものが主題となることなどあり得ない。主題として提示されるものは、表現主体が前提として特に意識していたもの、や事柄である。とすると、題目を提示する、主題を示すということが、「表現主体が前提として特に意識していた事柄をとりたてて示す」という「は」の用法にふさわしいものであるのは、至極当然のことなのだと言えるだろう。なお、主題の「体言＋は」という形から言って、とりたてられるものは事柄と並んでも、ものも多くなる。

次に、主題を示す「は」の例を、『万葉集』の中から幾つかあげておく。

42 隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲者妹にかもあらむ

(巻三)

558 ちはやぶる神の社にわが掛けし幣者賜らむ妹に逢はなくに

(巻四)

437 見渡せば向つ峰の上の花にはひ照りて立てる波愛しき誰が妻

(巻二十)

これらの、主題を示す「は」の例については、特に歌を解釈したりして説明を加える必要もないと思われる。ただ、次に示す一首については、少し考えておきたい。山部赤人の有名な歌である。

318 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪波降りける

(巻三)

実は殆どの注釈書が「富士の高嶺に雪が積っていることだ」のように、「雪は」の「は」を「が」と訳している。しかし、赤人には「は」を用いた理由があったのではないか。これまでみてきたような「は」の用法で考えられないものだろうか。

この歌は赤人が東國に赴き、初めて富士を見た感動を詠んだものだと思われる。恐らく当時の人々にとっても、富士は非常に有名な山であつたらう。また、富士と言えば噴火か雪を連想するほど、富士と雪とは密接に結びついたものだったのではないだろう。例えば、三一九番、三二〇番、三二一番の各歌も富士を詠んだものであるが、それらにも雪という語がみえており、雪が常に降っていたことが歌われている。また、仙覚の『万葉集註釈』には「富士の山には雪のふりつもりであるが六月十五日にその雪のきて、子の時よりしもには又ふりかはると駿河国風土記に見えたりといへり」という記述がある。これらはいずれも当時の人々の雪と関連させた富士のイメージといったものを示しているのだと思われる。赤人もまた、同じだったのではないか。だとすれば、赤人は眺望の利かない地を歩きつつ、富士を早く見たいと思ひ、また富士には常に雪が降り積っていると言うが、富士の雪とはどんなものなのだろうか、どのように降り積っているのだろうかなどと、雪を前提として特に意識していたのではないだろうか。そこで、「雪」を主題化して、それが「真白に降り積っている」ことを表現したのである。単に雪が降り積っていることを言

いたかったのではない。「真白にそ降りける」がこの歌のボイントなのである。そのことは、「真白にそ」の歌中における位置と「そ」の下接とによって知ることができる。「降る」の上に位置して、それを修飾すべき「真白に」が、「に」格である「不尽の高嶺に」の上位にまで上がっていること、更に「真白に」に「そ」が下接していること、これらはいずれも「真白に」を強調するものであり、なぜ「真白に」がそれほど強められるのかと言え、それは「真白に」が赤人にとって新しい発見であり、感動を引き起こした要因であったからに外ならない。赤人は富士に降り積っている雪の純白さに心を動かされたのである。この歌を「真白に雪が降り積っていることよ」のように考えたのでは、全体が気づきの意になり、それを描写した歌になってしまう。そして、「は」の使用の意義や「真白にそ」の位置、「そ」の存在等が無視されてしまうのである。

このように、主題を示す「は」も「表現主体が前提として特に意識していたものや事柄をとりたてて示す」場合に用いられると言えるのであるが、では主題を示しているとは考えられない「は」の場合にみられた「前提として特に意識していた事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示す」という用法は、全くないのだろうか。実は通じる用法がある。いわゆる対照の「は」がそれである。例えば、

133 小竹の葉者み山もさやに乱るともわれ者妹思ふ別れ来ぬれば
（巻二）
では、「小竹の葉」の主題化は「小竹の葉がザワザワと乱れてい

る」という状況からのとりたてと共に、「自分が乱れずに妹を思っていること」が前提として特に意識されていることが絡んでくるのではないだろうか。同じく、「われは妹思ふ」（私は乱れずに妹を思う）の意と述べた際には、「小竹の葉がザワザワと乱れていること」が前提として作者の意識に強く上っているように思われる。

対照の「は」はやはり主題を示す「は」の一種であり、表現主体が前提として特に意識していたものや事柄をとりたてて示しているのであるが、意識していた事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示していると考えられる面も持っているのである。

三 ま と め

本稿で明らかにしたことを、もう一度記しておく。

「は」は表現主体が前提として特に意識していたものや事柄をとりたてて示したり、その事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示す場合に用いられる。

主題を示す「は」とそうでない「は」とに共通するこの用法こそが、「は」の本来の用法であると言えるのではないだろうか。「とりたて」と言っても、「は」はどのようなものでもとりたててるわけではない。「は」による「とりたて」には右に述べたような特徴がみられるのである。このことを、特に古代語の場合は、他の係助詞との関連においても、重視すべきであらう。

なお、物語等においては、この結論に更に聞き手や場面といった要素が強く絡んでくると考えられるが、それはまた別の機会に

述べたいと思う。

注(1)

以下に本稿を成すにあたり、特に参考とした著書及び論文を示す。三上章『象は鼻が長い—日本文法入門—』(くろしお出版 一九六〇年)、此島正年『国語助詞の研究—助詞史の素描—』(桜楓社 一九六六年)、久野暉『日本文法研究』(大修館書店 一九七三年)、大野晋『日本語の文法を考える』(岩波書店 一九七八年)、青木伶子『主語承接の「は」助詞について』(『国語と国文学』三一巻三号 一九五四年)、大野晋『助詞へとガの機能について—現代日本語の基本的構文の意味—』(『文学』四三巻九号 一九七五年)。此島氏、青木氏のものは現代語中心の論ではないが、ここにあげておく。

(2) 「実質的概念」、「関係構成的職能」といった用語は北原保雄氏の術語に従う。

(3) 「本読んだ」や「花咲いた」といった表現の場合は、厳密には文の成分としての条件を完備したとは言えないように思う。

(4) この考え方は北原保雄氏の「補充成分と連用修飾成分—渡辺実氏の連用成分についての再検討—」(『国語学』九五集 一九七三年)その他の論文によるところが大きい。

(5) これは大系本『萬葉集』の現代語訳である。

(6) 近年は宮廷歌人という面を重視して、赤人の歌を解釈す

る説が盛んだが、この歌の根底には、やはり「富士を初めて見た感動」があると思う。

(7)

このあたりに「そ」「ぞ」と「は」との大きな違いがあるように思われる。「そ」の場合、ある事態に直面して初めてわかったことや気づいたことを示す傾向があったのではないだろうか。「ぞ」については、既に佐伯梅友氏に『「は」と「ぞ」』(『言語と文芸』八一号 一九七五年)という論文があり、また北原保雄氏も『日本語の世界6 日本文法の文法』(中央公論社 一九八一年)の中で論じておられるが、今後なお考察してゆくべき問題である。

(8)

現代語においても、主題を示す「は」の場合は勿論のこと、主題を示しているとは考えられない「は」の場合にも、「は」のこの用法には変化していない面があるようにだ。例えば「少しは勉強しろ」と言った場合、話し手は「当然ある程度勉強するものである」ということを前提として特に意識した上で発言していると考えられる。だが、「少し勉強しろ」では、話し手がそういったことを意識しているのかどうかは、必ずしも分明ではない。

付記

本稿は卒業論文(昭和五十八年三月)の一部であり、早大国語学会昭和五十八年五月例会で発表したものをまとめたものである。本稿を成すにあたり、桜井光昭先生に多くのご教示をいただいた。記して御礼申し上げます。

お願い

御一報願います。

『国文学研究』では、会員の皆様の新刊書の紹介につとめております。お気づきの新刊書がございましたら、編集委員会まで

また、著書が刊行されました際には、国文学研究室に是非一部御寄贈いただけますようお願い申し上げます。大学院生、学部学

生の閲覧に供し、研究資料として活用いたします。

(送り先) 千162新宿区戸山一—二四—

早稲田大学文学部国文研究室